明日の探検部

ー序にかえてー

OB会々長　小　野　龍　彌

我部の部報である「踏査」第1号の巻頭言に、当時の学長の矢口幸次郎先生が「探検の真義」という題で、要約すれば一真の探検は単なる冒険でなく広い智識と周到な計画に支えられ、広い人間生活とのつながりをもって行われることによって、はじめて真の意義をもつ一という指針をお与え下さった。

33年に部創立以来、我々の活動を支えて来たものは、未知の世界の克服という未熟な社会がより繁栄に向かう我国の姿そのまゝであった。

然し乍ら、急速なる繁栄の極みに立って、今や日本は自然破壊の精算を迫られ、精神の荒廃を指弾され、自戒の内に価値判断の転換を余儀なくされている。

斯様な社会情勢は我部にとっても、部員の減少、活動計画の枯渇となって部の存続を危うからしめている。慈に発表する日本縦断記は我部の伝統的活動として恐らく最後のものとなるであろう。我々は凡ゆる未来分析に基いて部発展の条件を模索している。人々の協調と自然との調和に則ったフイールドが現代のルネッサンスとして登場することを疑わない。

昭和 50 年 1 月 27 日